



鉢尾 R18小説

で い ね い
泥 凪 の 底 で



呉 野 六 ツ 時

月のない夜。

広い屋敷の一室で、男がひとり黙々と本を読んでいた。屋敷の主たるその男が頁を繰れば、静まり返った空間を乾いた音がぱらりとほどく。そしてまたすぐにしんと静まった。

夜も更け皆々が寝静まった後に、灯りを点して読書を楽しむのがこの男の日課である。

いつも通りに静かに更けゆく、穏やかな夜。だが書面を薄明るく照らしている焰ほむらが唐突にじりりと音を立て、空間を満たす静寂を僅かに乱した。風もないのに微妙に揺らめくその動きに合わせて、男の背後に這う陰もまた微かに伸び縮みする。

その中に潜むようにして影がひとつ、音もなく男に忍び寄る。

「――!? なっ、何や…っッ」

影は、異変を察した男が振り返るより早く、その喉元を掻き切った。断末魔さえ上げられぬまま、硬直した軀からだが床の上に崩れ落ちる。生ぬるい液体が刃の軌跡を追うようにびしやりと不快な音を立て飛び散った。無感動に転がる肉塊から湧き出る朱が、上質な畳に静かに広がり染みてゆく。

勘右衛門は壁に身を預けやや遠巻きに、魂を失い肉塊に成り果てた哀れな男を眺めやった。

この男は、とある城に勤める極めて善良で有能な臣下だった。己が城主に忠義を尽くし身分に囚われず広く声を聞き動く能がある。故に上からの信頼は厚く下からもよく慕われていた。だがその有能な男の命は今、彼を邪魔に思う下衆の差し金で密かに摘み取られた。訪れた異質な静寂の中に鉄錆の臭いが立ちのぼる。

再び灯明が小さく音を立て揺らめき、次いで薄灯りの下に影がゆらりと姿を現した。たった今己が屠った男に少しの関心も無い様子で淡々と刃の血を払う。

陰の中に半分沈んだその姿を、勘右衛門は無感動に眺めていた。

手際よく忍務を終え刀を収める友の瞳は、陰より深い闇に沈んでいる。もはや見慣れたその暗い淀みを見つめ、勘右衛門は僅かに残っていた迷いを切り捨てた。

先日垣間見た、苦しみを宿した瞳を思い出す。

痛みを湛え、しかし生気の戻った人より色の薄い瞳。そんな彼の目を最後に見たのは、もう随分と昔のことのように思えた。

久しく見ていなかったそれが、勘右衛門は好きだった。

彼の存在はいつだって、その魂に明かりを灯す。

——執着するものがあれば、喪つても壊れることはないだろう。

勘右衛門は潜んだ陰にそのまま溶けてしまいそうな友の背中を見つめ、これから己が進む道を定めた。

一、

鉢屋三郎はその日、集落の中ほどに位置する小高い丘上の古寺にいた。

悪名高い忍びたちが暮らす、隠れ里。この里での意思決定や情報伝達は、すべてこの古寺で行われる取り決めになっている。故に三郎は四半刻^{三十分}ほど前に打ち鳴らされた鐘の音に従い足を運び、伝えられるはずの情報を待っているのだった。

周囲には三郎と同様に集まった二、三十ほどの里者たちがいる。頭数から察するに、忍務に出ている者を除いたすべての忍びが既に揃っているようだ。

傍目にはただの薄汚れた農夫にしか見えないが、この場にいる全員が高度な忍びの技を会得した化け物でもある。化け物などと称するのはこの集落の忍びたちに正心——否、人の心がないからだ。

里者どもは皆、各々の欲と快楽にのみ従い生きている。自身の命の次に大事なものは己が損をしないことで、他人の生死になど少しの興味もない。たとえそれが毎朝毎晩顔を合わせてきた隣人相手であろうとも。むしろ隣人の死が己の益になるとなれば、旧知である分殺しやすいと喜んで命を奪いに行くだろう。

そんな血の通わない価値観に里者どもは疑問を持つことさえない。力なき者が奪われるのは当然のことで、それが嫌なら自身が強者となるか強者の傘に入るかすれればいいのだと考える。つまり『奪われる弱者おまえが悪い』というのが里の常識なのだ。助け合うことなどあるはずもない。得意とするのは諜報より殺しだ。忍びではなく暗殺者集団と呼んだ方が適切かもしれない。

会得した人知を超える技術や知識の数々を私利私欲のために、時に殺し自体を楽しむために喜んで用いる。そんな人の心を持たぬ輩どもを、化け物と言わずして何と言う。

周囲に集った化け物どもは、此度の招集は一体何事だろうかとさざめいている。あまり例を見ない突発的な招集である上に、一向に通達が始まらないため暇を持て余しているのだ。だが三郎には、集められた目的が何であろうとどうでもいいことだった。

『いい加減、遊びは終いにして戻ってこい』

そのような趣旨の文が忍術学園に届いたのは、半年ほど時を遡った夏の終わりのことだった。三郎は学園で過ごした懐かしい日々を思いを馳せる。

三郎が忍術学園に入学したのは今から五年ほど前、桜花が硬い花芽をほころばせ始めた頃だった。当時はまだ十にも満たない子どもだったが、学園の正門をくぐるその胸は、同輩となる他の子どもたちのように希望と期待に膨らんでないなかった。

それもそのはずだ。三郎が忍術学園に入学したのは忍術を学ぶためではなく、頭目たる父の『忍術学園がどのような組織か調べろ』という命に従うためだったのだから。

当時の三郎は既にいくつもの忍術を習得していた。頭目の実子として生を受け、幼き頃より厳しく仕込まれていたが故である。当然忍者としての基礎など身に染みついていたし、比較的簡単な内容ではあれどこれまでも単独でいくつもの忍務をこなしてすらいた。

三郎にとっては今回も忍務の一つでしかない。これまで同様ただ淡々とやり遂げるだけだし、しかし無事に潜入し事は順調に滑り出しているというのに、その心中はひどく荒れていた。

潜入忍務に不満があるわけではない。忍術学園の性質上、生徒として潜り込むのが最も確実であることは間違いないのだ。同じ歳の頃で単独での、しかも長期潜入忍務に耐えうる者など三郎を置いて他にいない。当然の采配であると認識していた。

ならば何が不満なのかといえば、潜入先の忍術学園そのものに対してである。

三郎は物心ついた頃から、文字通り血反吐を吐いて修行を積んできた。

忍びとなるか、死ぬか。鉢屋の里に生まれた、あるいは拾うか買いかして集められた幼子に提示される選択肢はその二つしかない。時勢柄、戦災孤児など珍しくない。替えはいくらでも利くのだ。忍びの技を会得できれば生き延びられるが、そのための修行は過酷を極める。故に耐えること叶わず命を落とす者も少なくない。

里の価値観の根底にあるのは『弱肉強食』、強者だけが生き残れるという考えだ。逆らえば命がないため里一の強者である頭目に従っているに過ぎず、抱いていても畏怖の念くらいだ。敬意など覚えるはずもなく、むしろ隙あらば寝首を掻いて頭目の座に就こうと狙っている輩がひしめいている。

なればこそ頭目の地位にある父の修行は輪を掛けて過酷だった。兄弟と呼ぶべき存在が実際は何人いて三郎が本当は何郎であったのかを、三郎は知らない。

それにひきかえ学園に所属する子どもたちは、本曰ただ今より忍びとしての一步を踏み出すのである。しかも六年をかけ大切に守り育てられ、ようやく一人前になるのだという。

(そんなぬるい組織なんぞ、わざわざ調べなくても大したことないに決まってる！)

小さいながら既に立派な化け物だった上に鼻持ちならないクソ餓鬼だった三郎は、その忍務を仰せつかった時点でそう決めつけていたのである。

大いに不満を抱えたまま学園へやってきた三郎は、用務員を名乗る中年忍者に従って入学の手続きを行った。だがその手続き自体が心中で燦る火種に注がれる油となった。

学園に対する反発心から、三郎は本名を名乗って入学を志願した。遠方とはいえ鉢屋の里は名の知れた組織である。その実力、利や欲のみを追求する悪辣あくらつな性質は権力者の間では有名だ。ぬるい体制を敷いているとはいえず、学園は忍びの組織なのだ。鉢屋の名すら聞いたことがない、などということがあるはずはない。

しかもそれを名乗るのが十にも満たない子どもと来れば、受け入れた結果どのような問題が生じてくるかは容易に想像できる。子どもの存在を知った強欲な野心家どもは競うように手を伸ばしてくることだろう。それ故歓迎するにせよ泳がせるにせよ迎え入れるなら、鉢屋の名は伏せさせるのが妥当である。

つまり三郎は『鉢屋』を名乗る入学希望者への対応如何から、学園の力量や性質をある程度把握してやろうと目論んでいたのだ。

——というのは半分以上建前である。

そもその潜在目的が学園の調査なのだ、入学した後には詳細に調べればよく鉢屋の名を出す必要性はない。それをわざわざ試すような行動に出たのは『忍術学園とやらのお手並み拝見といくか』という奢った本音を消化しきれなかったことが大きかった。

入学を拒否されたとしても現在拝借している誰ぞの姿を捨てて別人に化け、偽名で手続きをし直せばいいだけである。『鉢屋』で入学志願したとて忍務に支障はない。そう考えていた。

ところが。あろうことか学園は『鉢屋』三郎をそのまま新入生としてあっさり迎え入れた。しかも入学に当たり三郎がしたことと言えば、己の名を書面に記し持たされていた金を払っただけである。聞けば、入学金を納める以外に入学の条件がないらしい。

入学金や授業料を払うのがどれほど難しいことなのかを、当時の三郎は知らなかった。故に金さえ払えば身元調査すら行わずに組織への参入を許す、という学園の隙だらけな対応に対し

甘いにもほどがある、と怒りすら感じていたのである。

最初から侮っていた癖に勝手に肩透かしを食らった気分陥った三郎は、学園に対する不満を一層募らせていた。同時に『学園など大した組織ではない』という自身の認識は正しいのだと改めて確信したのだった。

だがどれほど不満があろうとも『郷に入つては郷に従え』というように、潜入するからにはその場に馴染まねばならない。つまり忍務を終えるまでは、ぬるい思想に染まったふりをして生活せねばならないのだ。それが苦痛に思えてならなかった。

だがそのぬるま湯で、三郎は多くの掛け替えない出会いを果たすこととなった。

まず挙げるべきは、やはり先生方の存在である。

一層舐めてかかっていた三郎はしかし、すぐに己の認識が誤りだったことを思い知らされる羽目になった。というのも、生意気な口を利いては避ける事叶わず鉄拳制裁を食らい、授業が面倒になって抜けだそうとしては即捕縛されると、日々鼻っ柱をへし折られ続けたのである。つまり当時の三郎ではまったく歯が立たなかった。

教師として名を連ねている忍びたちは皆、鉢屋の里なら五指に数えられるだろうほど優秀な者ばかりである。そう理解できている今だから言えることだが、そうなるのは当然だった。

そんな教師陣を束ねる学園長先生に至っては、最後まで『格が違う』ということしか分からなかった。はた迷惑な老人然としている癖に、相対すればただの爺ではないと感じさせられる。

しかし三郎には、隠された爪の先すら見えないのだ。その底知れなさに、父に感じるものとは異なる畏怖の念を覚え、己が井の中の蛙に過ぎなかったことを思い知らされた。

強者に逆らえば命はない——それは己に刷り込まれた教えである。だが日々の言動や態度から問題児認定されていた三郎は、そんな教師たちの注目を既に集めてしまっていたのである。そこで方針を変え、優等生を演じ己の存在を薄めることで彼らの目をすり抜けようと企てた。

しかし結論から言えばその目論見は大いに外れた。教師たちは三郎の態度に満足して関心を薄れさせるどころか、突然従順になった己を体調が悪いのではないかと心配し、今まで以上に目を掛けてくるようになってしまったのだ。

想像だにしていなかった展開に三郎は困惑した。どうしてこうなつたと頭を抱えたものの、己より優れている敵に注視される中で隠密調査を進めるなど、不可能である。それ故やきもきしながらも、ほとぼりが冷めるまで大人しくしている他なかった。

やむを得ず、ただ教師たちの教えを受け過ぎす。その中で三郎は次第に己の信ずるところ、その根幹となつていゝ里の考えに疑問を持つようになつていった。

授業で習う技術や知恵は当然とはいえ既知のものばかりである。しかし強者たる教師たちの態度は完全に未知のものだった。誰に対しても平等で、厳しくとも理不尽はなく、陰に日向に教え導く。馴れ合うわけではないが他人行儀でもない絶妙な距離を保ち、反抗的な態度を取り続けた三郎でも他の子どもでも態度を変えることはない。まるで忍務などで里を出た際に時折

垣間見てきた一般的な村や町のような、穏やかで温かな関係性がそこにあった。

当初三郎は、慣れない接し方で構われる度にむず痒さに苛まれていた。しかし慣れてくると教師たちと関わることで自体に心地よさを感じるようになり、これまで日常的に苛立ってばかりいたのが嘘のように、穏やかな気持ちでいられる時間が増えていった。そんな実体験を踏まえ三郎は『里の教えは本当に正しいのか』という疑問を抱き、教師たちの言葉に素直に耳を傾けるようになっていった。

こうして、幼少期より『力こそすべて』と教えられてきた三郎は力だけではない教師たちの存在に気付きを得、人らしく生きる第一歩を踏み出した。

だが性格はそう簡単変わるものではない。既に捻じ曲がってしまった三郎の根っこは考えを改めてなお捻じ曲がったままだった。それがある程度ましなものに叩き直したのは同輩たち、中でもとりわけ親しくなった四人の友人の存在だった。

同輩など三郎にとって煩わしい存在でしかなく、里の教えに疑問を持つようになってからもそれは変わらなかった。己より未熟な子どもから学ぶことなどなく、関わる時間は浪費にしかない。故に関わろうとしてくる同輩は邪魔でしかなかった。奢った考えを持ったクソ餓鬼らしい発想である。

故に三郎は意図的に、相手側が距離を取りたがるように仕向けていた。露骨に嫌味な態度を

取ったり、目の前で相手の姿を模して見せたりしたのである。自分とそっくりな人間が目の前にいるなど、この上なく気味の悪いことである。その高度な技を軽々とやってのけているのが幼い子どもで、しかも素顔は一切不明だという点もまた一層の気味の悪さを醸し出していた。だがそんな三郎に懲りもせず絡み続けてくる奇特定の奴がいた。それが不破雷蔵だった。

雷蔵は三郎の長屋の同室となった同輩で、どこにでも居るようなごく普通の子どもだった。……いや、度を逸した優柔不断さの持ち主で忍びとしては落第点としか言えない子どもだった。当然関わり合いになどなりたくない三郎は、彼にはとりわけ冷たく当たった。しかしどれだけ嫌味な態度を取っても、雷蔵は友好的な態度を崩そうとはしなかった。

ならばと彼の姿を写し取って見せたところ、目を輝かせ素晴らしい技術だと両手放しに賞賛した挙げ句もつと見せてくれと強請ってくる始末だった。他の子どもに使った手段がまったく通用しない変わり者だったのである。

思うように離れていつてくれない彼が疎ましくて仕様がなかった三郎は、苦肉の策で『姿を借りて悪さをし雷蔵に濡れ衣を着せる』という嫌がらせをするようになった。だが雷蔵は何度繰り返そうとも怒ったり泣いたり文句を言ったりするだけで、やはり三郎と関わることを自体を辞めようとはしない。

この状態をどうすれば打開できるか分からず半ばやけくそになった三郎は嫌がらせをしては彼と衝突することを繰り返した。だがそれがよくなかったようで、次第に雷蔵どころか周囲の

生徒たちすら三郎の変姿に慣れてしまい、彼に濡れ衣を着せること自体が難しくなっていた。結果雷蔵と縁を切ることとその手段とした変姿を用いての嫌がらせの両方に、悪戦苦闘する羽目になった。だがそんな三郎に雷蔵は事もなげに『姿を借りることまでは許容する』とまで言つてのけたのである。その言葉を耳にした時の衝撃と言ったら……忘れられるはずがない。でかいなんてもんじゃない、彼の器は幼い頃から海よりも広く深かったのだ。

三郎には白旗を揚げる以外、もうどうしようもなかった。故に、彼の言を試す意図もあつて日常的に姿を借りる代わりに、雷蔵の存在を受け入れることにしたのだった。

雷蔵のgori押しによつて三郎は、生まれて初めて他人に心を開いた。しかし渋々得た人生で初めての友人の隣は、すぐに何ものにも代え難い心地のよい居場所となつた。

当時の三郎は自己解決が難しい問題に直面した際、時間が解決してくれるか何らかの解決策を得られるまでひとりで困っていることしかできなかった。助力を得る方法など知らなかったし、それ以前に誰かに力を借りるという発想自体がなかったのだ。

しかしそんな時雷蔵は、半ば強引に踏み込んできて手を差し伸べてくれる。一方で、絶対に触れられたくないことにはそうと察して触れずにいてくれるのだ。その絶妙な塩梅が他人との関わり方を学び始めたばかりの、しかも特大の秘密を抱えた三郎にはひどく心地よかった。

以来三郎は自ら好んで雷蔵の姿を借り、彼の一番近くで過ごすようになった。そうして重ねてきた月日の中で、互いに心を許し信頼し合える相棒と呼べる関係にまでなったのである。

雷蔵と行動を共にするようになると、当然だが彼の周りにいる者たちとも接するようになる。以前から雷蔵と親しかった同じ組の竹谷八左エ門、組は違えど八左エ門と親しい久々知兵助、兵助と同室の尾浜勘右衛門と、雷蔵を起点として芋づる式に他人との接点が増えた。

だが当時三郎が心を開いたのは雷蔵にだけであり、他に対しては勿論クソ餓鬼のままだった。故に当たり前の流れではあったが、今度は雷蔵の友人たちと衝突するようになった。

煩わしく思っても、誰かと衝突する度に雷蔵はひどく悲しそうな顔をする。己が原因で彼が表情を曇らせるなど三郎には許容できなかった。それ故やむを得ず三郎は、他の同輩たちとの関わり方も並行して模索し始めた。

澁々ながら関わる人数、関わり合う時間を増やしていく中で三郎は、次第にこれまで感じてこなかった心の動きを感じ様々なことを考えるようになっていった。

怒って、泣いて、笑って。

初めて得た親しい存在との接し方に戸惑い、覚えた御しがたい感覚をどうにか制御しようと悪戦苦闘し、目まぐるしい心の変化に翻弄されながら忙しく日々を過ごした。他人の言動で己の心が動くこと、同様に己が相手の心を動かすことの幸福を初めて知った。喧嘩もたくさんしたし、共に下らない悪ふざけをしては先生や先輩の拳骨を食らっていたのも懐かしい。彼らと接する中で得た感情や感覚をひとつひとつ確かめ、共に拾い集めるようにして三郎は、人間

らしく生きる道を歩んできた。

先生や同輩、先輩後輩などの付き合いを通して三郎は、一つの疑問に答えを得た。

五車の術は人の心を掌握し操る、極めて基本的な忍術だ。だが里者はそのような術をあまり得意としていない。それが何故かと言えば、里者たちに心がないからだ。

人心を掌握するには己も人の心を持たねばならぬ。だが人の心を持てば他人に刃を振るうに躊躇う。人の心を持ちながら、迷い無く刃を振るうための導しるべとなるもの。それが正心なのだ。人は社会を形成し発展してきた生き物で、独りでは生きていけない。社会で生きていくには他人と上手く付き合っていく必要がある。人には心と感情があり、互いに尊重し合えなければ共に生きることなど不可能だ。獣と同じような生き方はできない。

忍者であろうと人であることに変わりはないのに、里者どもはおよそ人らしい感情など持ち合わせていないのだ。高い知能と技術を持った獣けだものでしかない。三郎の故郷が閉鎖的で空気が常に淀んでいるのは、里が心を欠いた者どもの集まりだからなのだろう。

里の教えは忍びの道どころか人の道からすら外れている。人間の組織のあり方として正しいとは思えない。

その結論は、三郎の腑にすんと落ちた。

以来三郎はこれまでが嘘だったかのように、周囲と積極的に関わるようになった。知ること

得ることすべてが新鮮で、目玉が交換されたのではないかと思うほど急に、無機質だった世界が色彩豊かに塗り替えられていった。己を変えるきっかけとなった強く穏やかで温かな人たちに囲まれて過ごす学園での毎日は、三郎にとって幸福そのものだった。

だからこそ、義務づけられていた年に一度の報告の度に三郎は、父の関心が学園に向くことがないように奔走し、あれこれ心を砕いてきた。

三郎が学園に送り込まれたのは、里の脅威になり得る組織かどうかを確認するためだった。そしてその頭目の懸念は杞憂ではなかった。学園は正心を胸に抱く優秀な忍者を多く擁し排出している。学園の真つ当な思想は、利と欲のみを追求する里の価値観と相反するものだ。

学園が脅威となり得ると知れたら、三郎は学園にいられなくなる。それで済めばまだいい方だが、恐らく里は脅威を早々に摘もうとするだろう。故に十中八九、戦になる。

純粋な戦力だけを比べれば間違いなく学園に軍配があがる。学園の教師陣には優秀な戦忍びが多くおられ、また懇意にしている城や縁者とのネットワークも盤石だ。

しかし学園は、将来有望なたまごたちが大勢属している組織でもあるのだ。無垢とも言える彼らは無限大の可能性を秘めている。個性が強く、忍者にはならずともそれぞれの道で大いに活躍するだろう逸材だらけだ。

だがそんな子どもたちの命を、里者どもは躊躇なく奪ってしまえるのだ。戦になればそんな事態に陥る可能性は少なからず生じてくる。それだけは絶対に避けなければならない。

加えて三郎は、戦において自身がどう振る舞うべきか決断できそうになかった。正しくなくとも里は生まれ故郷であり、父や血族に情がないわけではない。学園に牙を剥くことは絶対ないが、愛する学園を害さんとする里、父に対し自分は果たして刃を向けられるのか。

幸いにも、と言うべきだろうか。里は学園の噂が辛うじて聞こえてくる程度の遠方地にある。里が学園に害を為そうとさえしなければ戦になることはなく、三郎が悩む必要もない。

それ故三郎は愛しい学園を守るため、そしてかけがえの無い友人たちと過ごす喜びに満ちた日々を謳歌するために父の関心を学園から逸らす一方で、自分が学園に留まり続けられるようあらゆる手を尽くしてきたのである。

だが唐突に届いた一通の文によつて、三郎の穏やかで幸せな日々はあと一年と少しの間を残り終わりを迎えた。文面からは『忍術学園は取るに足らない組織だ』と頭目が判断したことが読み取れた。その結果自体は三郎の狙い通りであり大変喜ばしいことである。

だが仲間たちと卒業まで共に過ごしたい、というささやかな願いは叶わなかったのだ。

頭目の命には背けぬ。どのような事情があろうと背けば抜け忍として追われる身となろう。そうなつてはこれまでの努力がすべて水の泡だ。命が下った以上、三郎に選択肢などない。

故に三郎はすぐに退学届を提出し、この地に戻ってきたのだ。

秘匿の多い身の上だ、挨拶できたのは世話になった教師、その中でもごく一部だけだった。退学届を提出しに庵へ伺った際、学園長先生は理由も問わずに受理してくださった。その時、歳と経験を重ねようやく井戸の淵に立てるようになっていた三郎はようやく理解した。学園長先生は、いや学園は三郎の出自や入学の背景など把握した上で受け入れ成長を見守ってくれていたのだと。先生方の寛大な対応に溢れる感謝の気持ちをも、三郎はなんとか呑み込んだ。親しくしていた者たち、特に姿を貸してくれた相棒と三人の友人には、面と向かって別れを告げることもできなかった。己をよく理解してくれているだろう彼らには、退学する理由と殺した己の本心を上手く誤魔化せる気がしなかったのだ。

故に簡素ながら感謝と別れを綴った文を残し、三郎は愛しい学園をひとり去った。

（あれから、もう半年経つのか）

懐かしく幸福に満ちた日々思いを馳せていた三郎は、学園に別れを告げてから過ぎた時間を思いやや愕然とした。なるほど半年も経ていけば、苦痛に満ちた幼少期を過ごしただけの里の空気にも身体が馴染んできているはずである。

在学中も報告のために年に一度は帰郷していた。しかしここはいつだって空気が淀んでいて息苦しい。三郎は精神的な息苦しさを誤魔化すように意識的に深く息を吸った。

友人たちは今頃どうしているだろうか。そういえば今し方通ってきた寺の参道に植えられた梅が白い花を付けていたような気がする。

例年通りであれば、聞こえ始めた春の足音に急かされるように進級試験に追われ忙しくしているはずである。特に今年は最終学年への進級がかかっているのだ。これまでとは比べものにならないほど厳しい内容になっていることだろう。そろそろ結果が出る頃だろうが、皆無事に進級できたのだろうか。脳裏をよぎる級友の面々に申し訳なさが募る。

——できることなら級長として、最後まで面倒を見てやりたかった。

三郎が愛おしい学園の現在を夢想していると、周囲に満ちていたざわめきが唐突に止んだ。招集をかけた当人である頭目がようやく姿を現したのだろう。

そう推測しながらも三郎は、降り積もる恋しさを抑えることができなかった。学園へ馳せる思いを留められず、故に耳だけを上座へと向ける。

「頭目が次男より通達があり招集した。私の一存でこの者を里に迎えることにした。父の了解は取つてある。皆、誤つて殺したりせんように」

だが聞こえてきたのは父ではなく、すぐ上の兄の声だった。

随分と尊大な口ぶりだが、次兄の実力は大了たことはない。三郎と同じか、三郎の方がやや上を行くくらいの技量である。

だが現在この里の最上位に座する父の関心が息子に頭の地位を継がせることで自身の強さを顕

示することにあるが故に、僅かでも可能性のある次兄を害するわけにはいかないのだ。頭目の機嫌を損ねることは即ち死を意味する。強者の反感を買うリスクを負うより、渋々ながらも従った方が総合的に利があるという判断だ。つまり今の次兄はまさに『虎の威を借る狐』なのである。

通達の内容自体も三郎にとっては少しも重要でない。里に入る許可はしたもののこの場にはないということは、父の氣に留まるような人間では無かったということだ。単に次兄の個人的な希望で里に引き込む人間がいて、それが誤って殺されてしまわないよう里者たちに釘を刺しておきたかった。ただそれだけのことだろう。

忍術学園に学び正心を胸に秘めた三郎には不用意に他人を害する氣など毛頭なく、また次兄が引き込む人間にも興味はない。兄の氣まぐれに付き合うなど時間の無駄でしかない。

急速に関心を失った三郎は、上座に向けていた意識のさらに半分ほどを、自身の脳内に蘇る学園の懐かしい記憶を反芻する方へと配分し直した。

「初にお目にかかります」

だが続いて聞こえてきた声に、三郎は雷に打たれたような衝撃を受けた。

一瞬反芻していた記憶と現実とが混線したのかと思ひ混乱したが、彼がかつてそんな台詞を吐くのを聞いた記憶はない。反射的に顔を上げれば、いつも通りにご自慢の黒く美しい髭かもしを

つけた兄の傍らに、脳裏に思い描いた通りの、独特な癖のある長い髪を結い上げた青年がいる。

「勘右衛門と申します。 齡は十四と若輩者ではございますがご指導べんたつご鞭撻のほど、」

「か!? なッ、おまッ、なん……ッ?!」

はきはきと、しかしややかしこまった物言いで流暢に自己紹介を始めた青年に、三郎は驚愕のあまりに思わず声を上げた。視線の先で、言葉を遮られた青年が驚いたようにこちらに目を向ける。同時に周囲の里者どもの視線もまた一斉にこちらに向いた。

「なんだ三郎、知り合いか?」

兄から意外そうに尋ねられてようやく三郎は、自身が取った咄嗟の言動が軽率だったことに気が付き後悔した。

学園の同輩だった彼が何故ここにいるのかも分からない状況で、己と旧知の間柄であることを明るみに出すのは避けるべきだったのではないか——故に、己が次に取るべき行動に迷う。

「あれ? もしかしなくても三郎か? うわー久しぶり、偶然だな」

しかし問題の同輩、いや元同輩はやや瞠目したままではあったが当時と変わらぬ朗らかさで口を開いた。間延びした声と緊張感に欠ける態度に思わず脱力する。自身の言動を心底後悔し気を揉んでいた己が馬鹿馬鹿しく思えてくる。損得がすべてでは勿論ないし特に何かを損ねたわけでもないのだが、非常に複雑な気分である。

「勘右衛門は橋の袂たもとの小屋に住まわせる。通達は以上だ」

三郎が脱力している間に、言葉を継いだ次兄が淡々と通達を終わらせた。

里者どもは殺してはまずい人間の容姿を記憶したのだろう、情報伝達の義務を終えて気怠げにぞろぞろと寺を出ていく。

その最後尾に、今し方三郎を激しく動揺させた青年の後ろ姿があった。この場所で目にするなどあり得なかったはずの独特な風合いの髪が、その背でゆらゆらと揺れている。三郎は逸る思いでその背を追おうと一歩踏み出した。

「三郎は少し残れ、父上から言伝がある」

だが彼の名を口にする前に、続く次兄の言葉に阻まれる。三郎はやむなく、二度と見ることはないはずだった見知った背中を見送った。

父の言伝は新たな忍務の指令だった。大して難しい内容でもないが、行き先が遠方地であるため数日はかかりそうである。幸いなことに出立は明朝と、まだ時間に猶予はある。単独での忍務のため準備にもさほど手は掛からないだろう。

仔細のすべてを確認しそう判断した三郎は、了解した旨を兄に返答するが早いか急ぎ集落の外れへと足を向けた。山の麓にあるこの里で橋と言え、集落の外れを流れる急流に渡された一つしかない。その袂にある薄汚れた小屋に、目的の人物はいるはずだった。

「勘右衛門ッ!!」

「うるさいなあ、んな大声出さなくたって聞こえるって」

名を呼びながら小屋に飛び込むと、すぐに不機嫌そうな返答があった。

小屋内の空気は淀んでいてなんとなく^{かび}黴臭い。手入れされなくなつて久しく外観以上に痛んできているようだ。だが今の三郎に不快な臭いごときを気にしている暇はない。

聞こえた声を頼りに薄闇を透かし見れば、奥の方にこそと蠢いている人影がある。どうやらその人物は、割れ朽ちた床板の一部を引つ剥がそうと奮闘しているらしかった。

「悪いけどご覧の通り、まだ片付けで忙しいんだ。後にしてくんない？」

三郎が何かを言うより先にあつけらかんとした言葉が投げかけられた。半年ぶりの再会だというのにこちらに尻を向けたままで振り返りもしないとは、関心が薄いにも程があるだろう。しかもその口ぶりは気が急いで仕様がな己とは対照的に、いたくのんびりとしている。

複雑な気分陥った三郎をよそに、勘右衛門は唐突に「ふんっ！」と荒々しい鼻息を吐いた。同時に大きな破碎音を奏で、床板の一部がただの薄汚い木っ端へと姿を変える。

片手間過ぎる応対を受け、慌てて駆けつけた自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。だが三郎には彼の事情を把握しておかねばならない事情がある。期待外れな反応に募る苛立ちに、明朝から忍務という正当な理由を意図的に上書きして彼の求めには応じないことに決める。

「お前、なんでうちに……っ、学園はどうした!!」

「飛び級して卒業した☆ほら、俺って見た目以上にできる奴じゃん？」

直球での問いに、おどけたような答えが返ってきた。そう言う彼はたった今自身が力尽くで床板を引退させた端材と周囲とを見比べるのに忙しく、一向にこちらを見ない。なおもまともに相対しようとしないう勘右衛門に、既に斜めになりかけていた三郎の機嫌が一層傾いていく。

「茶化すな、真面目に答えろ」

唸るようにやり直しを迫れば、勘右衛門は元床板を適当に放り出してからようやくこちらを振り返った。見知った太い眉を片方だけ吊り上げ、肩をすくめる。

「なんだよいつもの可愛い冗談だろ？ ご機嫌ナナメだな、腹でも減ってるの？」

「んなわけあるかお前じゃあるまいし。いいから真面目に答えろと言ってるんだ」

なおもふざけた態度を改めない勘右衛門に、三郎は皮肉を交えながら食ってかかった。彼がようやく振り返ったことで多少溜飲は下がったが、それとこれとは話が別だ。先刻のふざけた回答が事実であるなどあり得ず、本当のところを聞かねば納得できるはずもない。

ますます目を吊り上げて無言で睨め付けねば、勘右衛門は丸い目をぱちくりと瞬いた。暫しこちらを呆けた様子で眺めた後、きょとんとした表情はそのままにゆっくりと口を開く。

「そりゃ、退学したに決まってんじゃない」

「なんでだよ!？」

何を馬鹿なことを、と言いたげにあっさりと言つてのけた勘右衛門に、三郎は半ば分かつていた癖に瞬時に噛みついた。

我らが愛しい学び舎を、自らの意志で棄ててきたと言うのか。選びたくとも自分には許されなかった、幸福に満ちたあの場所で過ごす時間を――。

三郎の胸中で自分勝手な不満が激しく渦巻く。彼がここに居ることへの驚きや今に至る経緯への関心と配慮は、残念ながら三郎の頭から完全に吹っ飛んでしまっていた。

怒りも露わな三郎を、勘右衛門は今一度その丸い目で不思議そうに眺めた。

「だって授業もなーんかつまんないし、お前も急に辞めちゃうしで最近退屈でさあ。そんならもう就職しちやおうかなって」

勘右衛門はようやく尤もらしい答えを口にした。やや不服そうに唇を突き出して説明する傍ら、半壊状態の床板に改めて向き直り格闘を再開する。

「そしたら面白い所があるから来ないかって誘われたんだよ。まさかその人がお前の兄貴で、就職先がお前の実家だとは思わなかったけど。いやゝすっごい偶然だよなあ」

説明を続ける声音は相変わらず至極のんびりとしている。緊張感の欠片もない調子で語られる事情もへったくれもない経緯に、三郎はなんとなく肩透かしを食らった気分になった。

「いや分かるだろ！鉢屋の里だぞ!」

「連れて来られるまで分かんなかったんだよ。どおも、鉢屋の民です☆とか名乗るわけもないじゃん、俺たち忍者なんだし」

反射的に口から飛び出した指摘は、しかし即あつさりと切り返された。

言われてみれば確かにその通りである。身内になることが確定していない相手に己の所属を正直に明かす忍者などいない。いるとしたら余程のうつけだ。

三郎の指摘が不適切だったのは認める。だがどうにも癪に障る言い方過ぎやしないだろうか。遠い未来の売れない芸人のような間抜けな口上には悪意があるというか、馬鹿にされている気

しかしない。いや絶対に馬鹿にしている。化け物どもの集まりに誇りなど持つてはいないが、一応は自分の生家である。さすがに少しばかり腹立たしく思った。

語られた動機と経緯、彼の言い回しの両方に憤慨していると、再び破壊音が轟いた。見れば彼の手には先刻より更に大物の元床板がある。

自分の関心事で頭がいっぱいだったため今まで気に留まっていなかったのだが、多少の余裕が生まれた今、三郎は改めて認識した現実^{おの}に少しばかり戦^{おの}いた。

朽ちてきているとはいえ床板である。道具も使わず素手で破壊するなど人間の成せる技とは思えない。万力鎖を自在に操る彼の腕力は今も健在、いや一層磨きが掛かっているようだ。

勘右衛門は引つ剥がした大物を、今度は特に検討もせず適当に放り出した。

「それにお前もお前の兄貴も素顔じゃないじゃん。当然偽名だったし……どう察しろと？」

今一度こちらへ向き直りつつわざとらしいほど大仰に肩をすくめて見せる。その芝居染みたりアクションも癪に障ったが、これまた彼の言うことも尤もである。

それに、彼が学園を退学するかどうかは彼の自由だ。三郎が口を挟むことでもなければ不満に思うことでもない。そう思い直し、渋々ながら矛を収めた。

なお、渋々矛を収めたのは勘右衛門の主張の正当性を認めたが故であり、順調に床板を素手で剥ぎ取っていく彼の腕力に戦慄したからなどでは断じてない。そう、断じて。

その間にも新たな格闘を始めていた勘右衛門は、早々に薄汚い木っ端を再生産した。それも適当に背後へ放り投げる。それは地面で一跳ねし、三郎のすぐ足下まで転がってきて止まった。「しかし、就職先に知り合いがいるなんてすごい安心感。しかも仲良しの三郎くんだし、俺ってツイてるゝ。よろしくな先輩！——あ、敬語にした方がいいですね、三男坊殿？」

「要らんわ阿呆」

なおも脳天気なことをのたまう勘右衛門に何故か得意げに笑いかけられ、三郎は思わず嘆息して暴言を吐いた。吊り上がりそうになる口の端を意識的に抑え無関心を装う。

古寺で紹介された時点で三郎は、勘右衛門が里にやって来たのには裏があるのではないかと勘ぐっていた。学園から遠く離れたこの地に偶然知人が現れるなど、そうそうある話ではない。鉢屋の里は悪評高い組織である。遠方の地とはいえ噂というものは口から口へ、人から人へと伝播する。本名で在籍していたが故に三郎も在学中、名に端を発した面倒事に巻き込まれたことが少なからずあったのだ。先生方の手回しもあってだろう、学園内では噂にすら里の話を聞くことはなかったが、勘右衛門がいずこかで噂を耳にした可能性は当然考慮すべきだ。

故にあの時三郎は、咄嗟とはいえ彼と旧知の間柄だと知らしめる反応をしてしまったことを悔いたのだ。本当に裏があるようなら、それが露見する前に彼を里から追い出してしまいたいと考えていた。化け物の一員に戻った今でも、友人たちを大切に思う気持ちに変わりはない。

勘右衛門の命が脅かされる事態に陥るのはどうあっても避けたかった。

だが人を食ったような発言ものらしくした態度も、学園で共に過ごしていた半年前と何一つ変わっていない。先の言にも違和感や不審な点はなく、説明に嘘はないようだ。

動転した結果しかした己の言動が、友の命を脅かす事態に繋がることはなさそう。そう判断して三郎はようやく安堵の息をついた。反面、自身の自意識と妄想力が過剰だった事実が付き猛烈な羞恥が込み上げてくる。

三郎が憂慮した『裏』の想像に『調査や袋の役割を目的とした潜入』というまあ妥当だろう目的の他『突然姿を消した自分を連れ戻す』という己に端を発した目的も含まれていたからだ。いや正直に言えばむしろ後者の方を主に懸念していた。『鉢屋』を名乗る人間などそう出会うことはない。三郎を知る者がその名を聞けば、当然関係があるものと考えらるだろう。

確かに三郎の本音としては学園を辞め里に戻るのは不本意だった。友人たちに面と向かって別れを告げられぬまま、たった一通の文だけを残し姿を消したのも事実である。

しかし三郎は正当な手続きを踏んで退学したのであって、^{かどわ}拐かされたわけではない。また、もし級友たちが本当に三郎を探そうと試みたとして里の事情、そして三郎の胸の内までもご存じだったろう学園長先生がそれを許可するはずもない。

自分では冷静でいたつもりだったのだが、突如目の前に現れた愛しい時間のよすがに逆上^{のぼ}せてしまっていたらしい。

「なあ、暇なら手伝ってくれよ。人が住める状態じゃないの見て分かるだろ？ 春先とは言えまだまだ寒いし、せめて雨風の心配のない寢床は確保しときたいんだけど」

ひとり羞恥と戦っていると、やや不満げな口調での援助要請が入った。

どこまでもマイペースな勘右衛門に少々呆れる。三郎の気持ちなど知る由もないだろうが、なんとも気の抜ける声音と物言いである。彼には相手を脱力させる才能がある。

そんな失礼なことを考えつつも改めて見渡せば、確かにこの小屋は人が住むにはあまりにも朽ち過ぎている。侵入してくる風は隙間風どころではないし、見上げれば大小様々にくり抜かれた曇天が視認できた。あの雲から雨が落ち始めたら雨漏りでは済まず屋内とは思えないほど水浸しになるだろう。小屋というよりあばら家という呼び方がしっくり来そうな、極めて悲惨な有様だった。

惨状を把握し改めて目をやれば、勘右衛門は壊れた床板の撤去作業をせっせと続けている。その様子に、乞うておきながら三郎の力を借りることに重きを置いていないことが見て取れた。在学中から変わらない友人の振る舞いに、三郎はなんとなく穏やかな気分になった。

表現が悪いが、勘右衛門は人の使い方が上手い男だった。物事に当たる際はよりよい方法的確に把握し、その上で必要な者の助力を得て適切な仕事を割り当てることができる。援助を

打診する際も根回しや見返りなど打てる手は打ち快く応じて貰えるように誘導するなど、することに卒がない。故に彼が主導する場合は円滑に事が進んだ。

逆に援助の相談を受けた際は可能な限り快く応じ、請けられない場合も別の人間を推すなど代替案を提示していた。その巧みさ故にだろう、彼を批判する声はほとんど聞かれなかった。それは三郎には持ち得ない能力であり、彼のそういう所を尊敬していた。

だが彼は、こと自身の個人的な事柄においてはどうしてか、同じように立ち振る舞おうとはしないのだ。必要と思えば助力を乞いはするが、ただ直球で依頼するに留まる。根回しなどもしなければ援助に期待し甘えることもない。断られれば仕方無いと諦め独力でどうにかしようとし、その最中に別の者が通りかかれればその者にも同様に頼んでみるだけなのだ。

人望故か、助力が得られず彼が困っている場面はそうなかった。それ故この事実を知る者はまずいないだろう。だがその手際に感心し真似できないかと観察していた三郎は知っていた。

あばら家の修繕においても同じだ。手伝ってやれば、彼はきつと朗らかに笑って礼を言う。だが断ったとしても、彼は「そうか、それは残念」と応じる程度で済ませてしまうのだろう。

この里における勘右衛門の知人は、三郎を除けば次兄だけである。しかし化け物の一員かつ『虎の威を借る狐』でしかない次兄が彼を手伝うなど当然するはずはない。里者どもの辞書に手伝うという単語は載っておらず、新参者である勘右衛門が里者どもの助力を得られるだけの魅力的な見返りを提示するなど、どだい無理な話だ。

そのくらいのことは、恐らく勘右衛門も承知しているはずだ。慣れない土地で、あばら家を独力で修繕するのが大変難儀なことだということも当然理解しているだろう。それでも三郎に強いてまで手伝って貰おうとはしない。勘右衛門はそういう男なのだ。

当時から変わらない謎に頑固な友人に、三郎はため息をついた。

今後この里で彼とどう付き合っていくべきか、まだ三郎の中で結論がついていない。ならば検討する前に関わり合いになるのは避けるべきだろう。返答に迷う余地はない。

だが何故だろうか、彼の頼みを素気なく断り、そんな己の返答をあつさりを受け入れられてしまうのは——何の感情も含まない彼の「そうか」を聞くのは、どうしても嫌だった。

再び天を仰ぎ見る。切り取られた曇天から太陽の位置を把握するのは難しい。しかし忍務の準備を考慮しても、まだ多少の猶予はありそうだということはなんとなく分かった。

「……………少しだけだぞ」

結局三郎は、遠回しに彼の求めに応じる旨を返答した。今後を考慮して親しさが滲まぬよう淡々とした口ぶりを心がける。ちらと窺い見れば、新たな木っ端を手にした勘右衛門がこちらを見て嬉しげに笑っていた。その懐かしい笑顔に満更でもない気分を噛み締め、しかし三郎は

真顔を崩さず即座に視線を逸らした。

足下に目を落とせば、先ほど勘右衛門が放り出した床板の残骸が転がっている。三郎はそれにゆっくりと手を伸ばした。

念のため彼が既に作業に戻っているのを気配で確認してから、勝手に吊り上がるのに任せて口元だけで薄く笑う。作るのではなく自然と笑みが浮かんだのは、随分久しぶりな気がした。

新たに迎えたばかりのこの同僚が、少しでも早くまともな寢床を確保できるといい。そんなことを淡く願いながら、三郎は薄汚い床板の破片を拾い上げた。